

都道府県別賞一等

未来を見据えて

千葉県 芝浦工業大学柏中学校 二学年

渡邊 和

「生命保険」とは、不安定な暮らしを安定させる役割をしていると私は考えた。なぜなら、日々の暮らしの中に様々な危険が潜んでいることを実感するからだ。例えば、その一つに治安の悪さがある。

私は、今年の夏、家族旅行で大阪に行った。そして、難波の繁華街を訪れた時、妹のバッグに付けていたICカードが気が付いたらなくなっていた。そのカードはケースから簡単に落ちるような仕組みではなかったが、足跡をたどるように店を回った。しかし、カードは見つからず、地元に戻ってきてから紛失届を出し、再発行をすると、約五千円入っていたチャージ金が、残高三十六円にまで減っていた。おそらく、旅行先で何かの拍子に盗まれたのだろう。私の住んでいる市は比較的治安がよいので、家族にとっても衝撃的な出来事であった。この一連の出来事を受けて、私は何よりも妹の体が無事だったことに安心している。結果的に失われたのはカードだけで済んだけれど、さらに悪質な方法で拉致や痴漢などの被害が起こるリスクも充分に想定できる。この数日間は「日本の大都市の現実を突きつけられた」そんな気分だった。

この広い世界で私たち人間は生きる。生き方は様々だ。そして死に方も人の数だけ存在しているのだろう。私はどう死んでいくのだろう。家族、友達は……きつとそれを運命というのだろう。選択できない最期を誰もが経験しなければならぬ。そんな不安定な世の中を少しでも安定させているのが「生命保険」ではないだろうか。

人が働けなくなると、その分だけ稼ぎがなくなる。一家の働き手が亡くなり、生命保険に入っていないと、残された家族はただでさえ悲しい別れで絶望の淵に立たされているというのに、金銭面での安定も図れない暮らしを送らなければならない。生命保険に加入していれば、このようなリスクを和らげることができる。例えば、突然のケガや入院で高額な治療費がかかる場合でも、給付金を受け取ることができ、負担が軽減されるだろう。とは言っても、景気の悪いこの世の中、もしものことを考えて、健全な体があるうちから保険料を払って、未来の安心を買う人はそう多くはないだろう。何より、私も含め、自分の死に對してリアリティーがわからないのではないか。熊本地震も身近にあるようで、実は他人事としてとらえている自分がある。

だが、毎年終戦記念日や三月十一日など多くの人々が亡くなった日を迎える

第54回中学生作文コンクール

たび、『私は、生きた時代や場所が異なっただけなのだ』とつくづく思う。
世の中はとて不平等で、平穩に流れていたはずの日々が無差別なテロや
自然災害で脅かされることがある。そう考えると、自分の身を守り、体をいた
わらなければならぬと思った。どんな状況に置かれても、この命を最期まで
大切にす。未来の命のために生命保険を今、考える。私が生きている今日は、
誰かが生きたかった明日なのだから。